
第II部 尼崎市クロニクル

一〇〇年のあゆみ

原始・古代

〔尼崎のできごと〕

約一二万年前の最終間氷期以降、最終氷期に向けた寒冷化と、その間の小規模な寒暖の変化を通じて、現尼崎地域の地下に多段の段丘面が形成された。
約五〜六千年前の縄文海進以降、海退とともに大阪湾の沿岸潮流や猪名川・武庫川両水系が運ぶ土砂が伊丹台地の南に堆積し、沖積層からなる尼崎平野が形成された。

縄文時代

尼崎地域の多くははまだ海であった。
現在まで市域に縄文時代の明確な遺構は確認されていない。

弥生時代

海退と沖積層の堆積により、現尼崎地域の陸地化が進んだ。
上ノ島・田能・武庫庄など、現市域北半部各所に集落が形成された。

古墳時代

池田山古墳など猪名野古墳群に属する古墳及び、水堂古墳が築かれた。

七世紀

この頃、猪名寺の地に法隆寺式伽藍配置の寺院（猪名寺廃寺）が造営された。

七五六年（天平勝宝八）

この年、猪名の地が東大寺に勅施入され、猪名荘が成立した。

七八五年（延暦四）

「続日本紀」正月一四日条に、摂津国三国川（神崎川）開削の記事がある。これにより淀川と神崎川が結ばれ、神崎川河口付近の港が長岡京・平安京と瀬戸内・西国を結ぶ交通の要衝となった。

一〇八四年（応徳元）

鴨社領長洲御厨が成立した。この土地をめぐる鴨社と東大寺の争いが、一四世紀前半頃まで続いた。

八月一〇日

源氏の棟梁である兄・源頼朝と不和となった義経が、西国での再起を期して大物から船出するも嵐のため難船し、和泉浦へと逃亡した。

一一八五年（文治元）
一一月

中世

〔尼崎のできごと〕

一一二四年（建保二）

この頃、東大寺領猪名荘の荘田は四五町余り。同寺領長洲などの浜（長洲荘）には在家六八七家があったと記録されている。

一二八七年（弘安一〇）
一月

時宗開祖として諸国を遊行しながら布教した一遍上人が、尼崎を訪れ勧進を行なったと伝えられる。

一三三六〜一三九二年

交通の要衝である尼崎地域は、しばしば戦乱の舞台となった。この前後、尼崎合戦・坂部合戦・神崎合戦・浄光寺合戦などがあった。

一三三八年（延元三）
暦応元）

この年、石清水八幡宮再建に尼崎番匠（棟梁大工）が加わった。尼崎番匠と神崎番匠は、各地の社寺造営に携わったと考えられている。

一三三五年（正平六）
観応二）二月二六日

足利尊氏の有力家臣である高師直・師泰兄弟が、武庫川の東で足利直義方の上杉能憲らに襲われ殺害された。

一四二〇年（応永二七）
六月二七日

朝鮮使節の宋希璟が尼崎に宿泊した。自身の見聞録『老松堂日本行録』に、付近の農村で稲・麦・蕎麦の三毛作を行なっていると記している。

一四六七年（応仁元）
八月七日

尼崎の若衆が大内政弘勢に敵対したため町が焼かれ、女子供までが殺されたと伝えられる。

一四八七年（長享元）
一五三一年（享祿四）
六月四日

大徳寺如意庵領から富松城縄竹代出銭の記録があり、これ以前に築城と考えられる。大物崩れ。細川晴元勢との合戦に敗れた細川高国が尼崎へ逃れたが、五日に捕えられ、八日に大物広徳寺で切腹させられた。

一五六八年（永祿一一）
三月六日

この年の夏、ポルトガルの宣教師リス・フロイスが尼崎を訪れ、キリスト教を布教した。

一五六九年（永祿一二）
三月六日

尼崎衆が信長の軍勢に抵抗したため、長遠寺・如来院を除いて町が焼き払われた。

一五七八年（天正六）
一〇月

荒木村重、信長にそむく。翌天正七年の暮れに伊丹・有岡城が落城し、一二月三日、村重一統の妻子ら六百数十人が七松で処刑された。

一五八二年（天正一〇）
六月

中国大返し。備中高松城を囲んでいた羽柴秀吉は毛利方と和議を結んで山陽道を急走し、六月一日に尼崎に到着して明智光秀討伐の軍議を行なった。

〔日本のできごと〕

三世紀 『三國志』「魏志倭人伝」が邪馬台国を記述

五世紀 この前後、河内平野の古市古墳群・百舌鳥古

墳群に属する巨大古墳築造

六四六年（大化二）大化の改新、改新の詔発布

六七二年（天武天皇元）壬申の乱

七一〇年（和銅三）平城京遷都

七九四年（延暦一三）平安京遷都

九三五年（承平五）承平天慶の乱（平将門・藤原純友の

反乱）が始まる

一一五六年（保元元）保元の乱

一一六〇年（平治元）平治の乱

一一八五年（元暦二・寿永四）壇ノ浦合戦、平氏滅亡



猪名寺廃寺礎石

〔日本のできごと〕

一一八五年（文治元）鎌倉幕府成立

一二二一年（承久三）承久の乱

一二七四年（文永一一）元寇、文永の役

一二八一年（弘安四）元寇、弘安の役

一三三八年（延元三・建武五）室町幕府成立

一四二八年（正長元）正長の土一揆

一四六七年（応仁元）応仁の乱始まる

一五四三年（天文二二）種子島に漂着したポルトガル

人により鉄砲が伝来したと伝えられる

一五六八年（永祿一一）織田信長入京

一五八二年（天正一〇）本能寺の変



富松城跡 昭和41年撮影

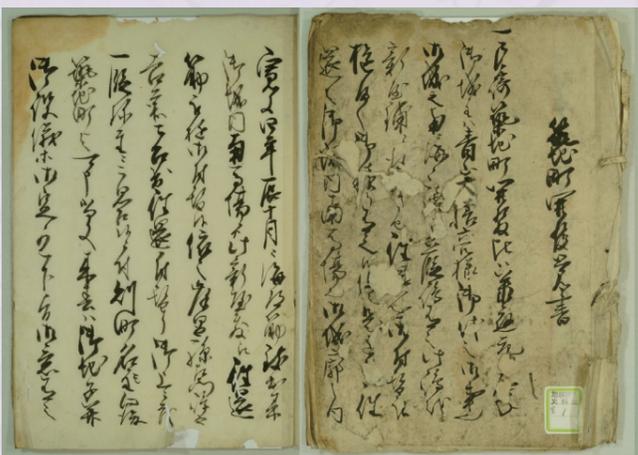
近世

(尼崎のときごと)

- 一五八四年(天正二二) この頃、建部高光が尼崎郡代として尼崎城に在勤した。
- 一五八八年(天正二六) 豊臣秀吉配下の武将・佐々成政が、任地・肥後国に起こった国人一揆の責めを負い、尼崎の法華寺で切腹した。
- 一五九二年(天正二〇) 千ばつのため三平井組と大井組の水争いが起こり、両井組農民が猪名川で槍・長刀を持ち出し大乱闘の未死者を出し、双方の庄屋が斬罪となった。猪名川・武庫川両水系の村々では、この後もしばしば水論が繰り返された。
- 一六一七年(元和三) 戸田氏鉄が五万石の大名として近江国膳所から尼崎への所替えを命じられた。氏鉄は幕府から戦国期尼崎城に替わる新たな尼崎城の築城を命じられ、元和四年に築城と城下町建設を開始し、元和六年以降は徳川大坂城修築工事の奉行も務めた。
- 一六三五年(寛永一二) 戸田氏鉄が美濃国大垣へ所替えを命じられ、替わって青山幸成が遠江国掛川から尼崎へ所替えとなった。
- 七月二八日 国学者・契沖が、尼崎藩士下川元全の子として尼崎で生まれた。
- 一六四〇年(寛永一七) 尼崎藩が朝鮮通信使を兵庫津で接待した(記録上最初の尼崎藩による通信使接待)。尼崎藩はこの後、最後の通信使江戸来航となる宝暦度に至るまで、通信使の接待を担当した。
- 一六五三年(承応二) 大坂玉造の鍵屋九郎兵衛らが、太布協開発(道意新田の開発)を尼崎藩に出願した。
- 五月一五日 この頃から、海岸部の新田開発が盛んに行なわれた。
- 一六六四年(寛文四) 青山氏入封後、建設が開始された築地町が完成した。
- 一六八八〜一七〇四年(元禄年間) この頃、中在家町戎の浜の魚市場には約千人の商人が集まり、京都方面へ魚を運ぶ商人も出入りしたと記録されている。

(日本のときごと)

- 一五九二年(文禄元) 朝鮮出兵、文禄・慶長の役開始
- 一六〇〇年(慶長五) 関ヶ原の戦い
- 一六〇三年(慶長八) 徳川幕府成立
- 一六一五年(慶長二〇) 大坂夏の陣、大坂城が落城し豊臣氏滅亡
- 一六三七年(寛永一四) 島原の乱始まる
- 一六四三年(寛永二〇) 田畑永代売買禁止令
- 一六五七年(明暦三) 明暦の大火
- 一六八七年(貞享四) 生類憐れみの令



尼崎市立地域研究史料館所蔵 室木利一郎氏文書
「築地町開発覚書」冒頭部分及び寛文4年(1664)の築地町完成を記した箇所

寛文四年正月十日海防御法

- 一七二一年(宝永八) 青山幸侶が信濃国飯山への所替えを命じられ、替わって松平忠喬が遠江国掛川から四万石の大名として尼崎へ所替えとなった。
- 二月一一日 久々知広濟寺を再興した日昌上人と懇意であった近松門左衛門が、同寺の開山講中に加わった。近松はしばしば久々知を訪れたと伝えられ、広濟寺には近松と妻の法名を刻んだ墓が遺されている。
- 九月

- 一七二六年(享保元) この頃、尼崎城下の町人人口は一万六四三九人、家数は一、六四一軒であった。
- 一七二六年(享保一二) 幕府は尼崎藩に対して、武庫川をはじめ有馬・武庫・川辺郡内の河川堤普請を担当する土砂留大名を務めるよう命じた。
- 七月一十九日 中国商人から將軍徳川吉宗に献上されるベトナム産の象を連れた象行列の一行が、尼崎城下西側の別所村に宿泊した。
- 四月一十九日 享保の大飢饉のこの年、尼崎藩領でも稲に虫が付く被害が発生し、収穫量が例年を大幅に下回った。
- 一七三二年(享保一七)

- 一七三八年(元文三) 次屋・浜・水堂など旗本青山幸覃知行所の農民が、御用銀などの強引な徴収に抗議して、妻子ともども村から逃散した。
- 七月
- 一七六四年(明和元) 浜田と西難波の村民が、浜田川の水利をめぐる騒動をおこした。この結果、浜田の村役人ら八人が入牢し、翌年にかけて多くが牢死する結果となった。
- 一〇月二〇日 幕府は尼崎藩領のうち西宮町・兵庫津・灘目村々などを直領とし、播磨国内に替え地を与えることを申し渡した。
- 一七六九年(明和六)
- 二月一三日
- 一七八一年(天明元)
- 七月四日
- 一七九七年(寛政九)
- 一〇月二七日

武庫川原で尼崎藩の砲術訓練が行なわれ、鉄砲と花火の見物におびたらしい群衆が集まったと記録されている。

武庫・川辺・豊島三郡の村々が、菜種の自由販売、在々絞り油屋の直接小売解禁を求めて大坂町奉行所に訴え出た。翌年にかけて三郡・近隣から、同様の出訴が相次いだ。

- 一七〇三年(元禄一五) 赤穂浪士討ち入り
- 一七二六年(享保元) 徳川吉宗將軍となる、以後享保の改革
- 一七八三年(天明三) 浅間山大噴火、この前後天明の大飢饉
- 一七八七年(天明七) 寛政の改革開始



浜田川水論牢死者墓碑(浜田町二丁目)

近世(続き)

(尼崎のできごと)

- 一八〇五年(文化二) 伊能忠敬ら幕府測量隊の一行が神崎から測量を開始し、尼崎城下に入った。
- 一〇月二日 文化五年にも、神崎から伊丹郷町にかけて測量した。
- 一八二六年(文政九) オランダ商館付きのドイツ人医師シーボルトが商館長の江戸参府に随行し、二月と五月に陸路尼崎城下を通過した。
- 一八二八年(文政二一) 尼崎藩は向こう三年間家中の俸禄を大幅に削減する上げ米を命じた。この後も藩財政改革に取り組むが、藩財政の窮迫が続いた。
- 一〇月 幕府は、播州の尼崎藩領の一部を直領とし、替え地を摂津に与えると申し渡した。文政一三年からこの年にかけて、畿内近国各所でおかげ踊りが流行した。六月には尼崎城下や村々でもおかげ踊りがみられた。
- 一八三七年(天保八) 大坂守衛を担当する尼崎藩は、大塩平八郎の乱の知らせを受けて尼崎城下の警護を固めるとともに、武装藩兵の部隊や人足を大坂に派遣した。
- 二月一九日 一八五四年(嘉永七) プチャーチン率いるロシア艦が尼崎近辺に停泊し、月末まで湾口・沿岸を測量するなど大阪湾内にとどまった。これを契機として、摂海防備の問題が浮上した。
- 九月一八日 一八六四年(元治元) 禁門の変で敗走した長州藩の山本文之助鑑光が尼崎で捕まり自決した。その後、山本文之助の墓を参詣して願をかけることが流行し、残念さん信仰が生まれた。
- 七月二〇日

(日本のできごと)

- 一八二五年(文政八) 異国船打払令
- 一八三三年(天保四) 天保の大飢饉始まる
- 一八三七年(天保八) 大塩平八郎の乱
- 一八四一年(天保二二) 天保の改革開始
- 一八五三年(嘉永六) 米ペリー艦隊・露・プチャーチン艦隊来航、翌嘉永七・安政元年、幕府は米英露との間にそれぞれ和親条約を締結
- 一八五八年(安政五) 安政の大獄開始
- 一八六〇年(安政七) 桜田門外の変
- 一八六四年(元治元) 禁門の変、第一次長州征伐
- 一八六七年(慶応三) 大政奉還
- 一八六八年(慶応四・明治元) 戊辰戦争開始



残念さんの墓『小田村勢』(小田村、昭和七年)より

近代(市制施行以前)

(尼崎のできごと)

- 一八七一年(明治四) 前日(七月一四日)に維新政府が廃藩置県を命じた結果、桜井忠興がこの日に尼崎藩知事を免じられ、尼崎藩が尼崎県となった。
- 七月一五日 明治四年十一月に廃止が決定した尼崎県の兵庫県移管が完了し、現市域全域が兵庫県管轄となった。旧尼崎県士族・卒は、兵庫県貴属に編入された。
- 二月一〇日 一八七三年(明治六) 学制による現市域初の学校である常松小学が開校した。この後尼崎町や市域村々に学校が開校し、明治二二年の町村制施行に向けて徐々に整理統合されていった。
- 二月二〇日 一八七四年(明治七) 官設鉄道の大阪―神戸間が、国内二番目の鉄道路線として開通した。六月一日には神崎ステーション(現JR尼崎駅)が開設された。
- 五月一日 一八七九年(明治二二) 兵庫県の区制が廃止され、川辺郡役所(伊丹)と武庫郡役所(西宮)が設置された。またこの年、各町村に戸長役場を設置することになった。
- 一月八日 一八八九年(明治二二) 町村制施行により、尼崎町と、小田村・大庄村・立花村・武庫村・園田村の各村が発足した。
- 四月一日 辰巳町に本社を置く尼崎紡績の創設が認可された。
- 六月一九日 一八九一年(明治二四) 尼崎―伊丹間の川辺馬車鉄道が開通した。のちに摂津鉄道、阪鶴鉄道に路線が継承され、明治四〇年の国有化後、官設鉄道福知山線・尼崎支線となった。
- 一八九六年(明治二九) 町会議員らが県に尼崎への遊郭設置を出願し、反対派が『琴陽雑誌』誌上に反対論を展開した。後年まで設置要望が続いたが、設置は実現しなかった。
- 一九〇五年(明治三八) 四月一二日 大阪―神戸間の阪神電鉄本線が開業した。同社は尼崎町に本社を置き、明治三九年五月一日には記録上尼崎初の労働争議であるストライキが発生した。
- 一九〇六年(明治三九) 城内の伊丹警察署尼崎分署が、尼崎警察署に昇格した。
- 一〇月一日 一九〇七年(明治四〇) 中在家町に本社を置く旭硝子が創設された。財閥系企業の尼崎初進出であり、臨海部重化学工業地帯化の先駆けであった。
- 九月八日 一九〇八年(明治四一) 阪神電鉄が、城内の尼崎発電所(現阪神電鉄尼崎倉庫)及び御影発電所の電力をもつて、尼崎町など沿線町村への電灯・電力供給事業を開始した。
- 一〇月五日

(日本と世界のできごと)

- 一八六九年(明治二) 版籍奉還
- 一八七一年(明治四) 廃藩置県
- 一八七四年(明治七) 自由民権運動始まる
- 一八八九年(明治二二) 大日本帝国憲法発布
- 一八九四年(明治二七) 日清戦争開戦
- 一九〇〇年(明治三三) 中国、義和団蜂起
- 一九〇四年(明治三七) 日露戦争開戦
- 一九一〇年(明治四三) 日本、韓国を併合
- 一九一一年(明治四四) 中国辛亥革命
- 一九一四年(大正三) 第一次世界大戦開戦



旭硝子絵はがき 大正3年頃撮影